旧富岡製糸場西置繭所保存整備事業

富岡市　殿
富岡製糸場保存修理委員会　殿
富岡製糸場整備活用計画実行委員会　殿
公益財団法人文化財建造物保存技術協会　殿
有限会社江尻建築構造設計事務所　殿
株式会社森村設計　殿
竹中・タルヤ共同企業体　殿

富岡製糸場は、明治政府によって 1872 年（明治 5 年)、国の近代化を支える基幹産業としての製糸業を発展させるため、フランスから先進の器械式製糸技術を導入して設立された。所有者の変遷を経て、1987 年に操業が停止してからも大切に保存され、2005 年には国史跡に、2006 年には建造物が重要文化財に、2014 年 6 月には「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてユネスコ「世界遺産一覧表」に記載され、同年 12 月には繰糸所、東置繭所と西置繭所の三棟が国宝指定された。この間、2005 年 11 月に富岡市が管理団体に指定され、富岡市は、2008 年には「富岡製糸場保存管理計画」を、2012 年には「富岡製糸場整備活用計画」を策定し、「富岡製糸場が重ねてきた歴史とシステムを保存管理し、整備し、多様な魅力を最大限に引き出す」という基本方針を定めた。

西置繭所は、場内主要構造物の最初の本格的な保存修理・整備事業として、2015 年に工事が開始され 2020 年に完成した。文化財の保存修理では、歴史資料に加えて建物の改造の痕跡などについても綿密な調査が行われる。西置繭所においては、屋根、ベランダ木部、1 階床組み、建具の解体工事も行われ、建設時の技術や仕様、改造の履歴や、建物用途の変化、貯繭方法の発展過程など、製糸場の変遷を知る貴重な情報が得られ、これらの調査結果に基づいて富岡製糸場の生産が最盛期であった 1974 年頃の姿に復旧する方針が立てられた。これらの貴重な情報は、保存修理報告書としてまとめられている。

富岡製糸場は、我が国に唯一完全な形で残る明治初期の木骨煉瓦造の遺構である。構造的な特性については不明な点が多く、先行して耐震診断事業が実施された。躯体調査や地盤調査により建物の構造的な特徴と物性および地盤の状況が把握され、さらに木骨煉瓦造壁の実大静的載荷実験及び振動台実験が行われ、力学的特性を把握した上で構造補強案が検討された。

文化財の保存と活用と耐震補強の三要素が緊密に連携することで、繊細な文化財の価値を損ねることなく、新たな機能の付加と積極的な耐震補強を実現している点が、本事業の最大の特徴である。1 階は軽快な鉄骨フレームで耐震補強するとともに、ガラスボックスを挿入して展示スペースと多目的ホールを創出している。2 階は炭素繊維複合材料を用いた軽量で強いストランドにより最小限のブレース補強を施し、貯繭空間が体感できるようになっている。1 階の展示スペースでは、富岡製糸場で働き暮らした女工達の生活、製糸工程などが解説・展示されており、多目的ホールは、国宝の中でイベントを体験できる貴

重な場を提供している。既存建物は、逆にガラスボックスの中から見られるようになっており、既存建物に対する空調負荷の軽減や漆喰等の剥落に対する利用者の保護が図られている。操業中に繭を運搬する台車が漆喰壁を擦った傷、原料繭格納中の数量メモなど「操業中の痕跡」も残し、見学者の視線が行くように細やかな配慮がなされている。また、新たな動線を確保する必要性に対応するため、保存と活用の両方の観点から、かつて開口部が設けられていた後に塞がれていた床面の木部材を取り外して再び開口し、エレベーターと階段を新設する解決策を導き出した。

以上のように、近代日本の絹産業を支えた西置繭所は、製糸業の歴史を記録し後世に伝える文化施設としての新たな機能を備えて再生した。ともすれば当時の姿のままに残すことだけが優先される硬直的な保存ではなく、今後の活用を視野に入れた創意工夫がなされており、文化財保存・活用の先導的事例として価値のある業績と判断した。富岡市をはじめ、保存管理、整備活用、耐震補強の関係者が密に連携することにより実現できた業績であり、このように膨大で繊細かつ緻密な作業を丹念に実施した工事関係者にも敬意を表したい。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。